

2部 1章 身近な地域を調べよう

山口県 公立中学校教諭

1 三段階から演出する地域調査との出会い

「身近な地域の調査」は、地理学習を進めていくための基礎・基本が詰まった学習である。なかでも、野外調査によって、より多くのことを学ばせることが可能であるが、本書ではそれができない学校への配慮もされている。

(1) 学校の実態に応じた内容構成

本書は次のような内容構成をしている。

- 「自分の足で動いて考える」(p.40~45)
- 「調べる範囲を市全体へと広げる」
(p.46~53)
- 「調べた結果をまとめる」(p.54~55)

とくに、具体的な調査を「自分の足で動いて考える」と「調べる範囲を市全体へと広げる」の二段階にすることによって、野外調査を行うことができない学校や、市町村合併が進み、面積が飛躍的に拡大した地域での対応を考えることができる。

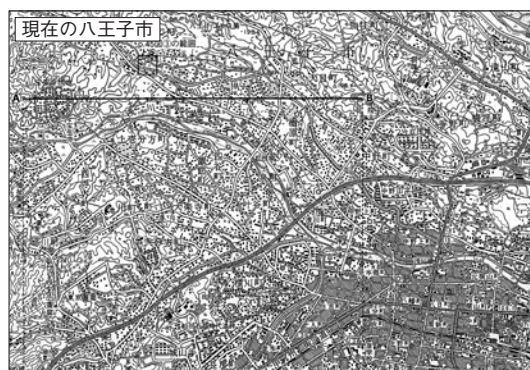
(2) 調べる範囲を市全体へと広げる

ここでは、「地形図を使った調査」と「その他の資料を使った調査」の二段階を設定している。

とくに、地形図を使った調査は、新旧の二つの地形図を比較しながら地域的特色を考察する提案である。これは、「変化」に注目させた調査方法であり、地理学習において重要な視点となる。調査対象地域の変化に合わせて



「中学生の地理 初訂版」p.47



「中学生の地理 初訂版」p.46

使用する地形図の年度を考えさせてみよう。いつも2枚というわけではない。また、地形図以外の資料を使った調査をさせてみよう。p.53に「おもな資料と入手先」を示しているので、可能な限り子どもたちに入手させてみるとよい。

「地形図の使い方1」「地形図の使い方2」として、コラムの形で指導内容を示している。子どもたちの学習の進度や習熟度に合わせて、指導内容を決定していただきたい。

2 地域調査の単元構成

それでは、地域調査の一般的な流れについて例を挙げて説明しよう。

次	学習内容	おもな学習活動
1	調査対象地域に対する認識の確認	自分たちが住んでいる地域の特色と、それを成立させている地理的事象を挙げさせる。
2	目標の確認	これから始まる「身近な地域」の地域調査の目標を知り、調査の進め方を考える。
3	野外調査	ノートをもちながら校外に出て、実際に野外調査を行う。
4	野外調査のまとめ	野外調査の結果を考察し、自分たちの校区の特色をまとめる。
5	地形図を使った調査	5万分の1の地形図を活用しながら、より広い範囲の特色をまとめる。
6	景観写真を使った各地域の比較	地形図から読みとった特色の異なる地域ごとの景観写真を比較しまとめる。
7	新旧の地形図の比較	現在の特色が生まれる前の特色を比較し、地域の変化について考察する。
8	資料を用いた調査	統計資料や文献資料等から獲得した情報をもとに、地域的特色を明らかにする。
9	調査結果のまとめ	これまでの調査結果をもとに調査対象地域の地域的特色を明らかにする。
10	他地域との比較	これまでの調査で明らかとなった結果を他地域と比較し、共通点や相違点として自覚する。
11	調査方法の確認	調査を進めていくうえで有効だった方法を確認する。

左に示したのが、地域調査の一般的、基本的なパターンであり、それぞれの地域でこれらをアレンジするとともに、教科書の活用を考えていただきたい。

次にこの単元に位置づけた特色ある学習活動の内容を説明しよう。

(1) 評価を意識した単元構成

第1次「調査対象地域に対する認識の確認」と第9次「調査結果のまとめ」は、評価を意識したものである。ここでは、調査前と調査後とで自分たちが住んでいる地域に対する認識がどのように変わったかを比較し把握する活動は、明確に単元構成表に位置づける。

(2) 野外調査

「総合的な学習の時間」等を活用して、野外調査の時間をまとめてとることも考えられる。この際、地理学習固有の目標をもたせることを忘れてはならない。地形図の活用の仕方や地域の特色をとらえる視点など、地理の学習と「総合的な学習の時間」とでは、学習の目標がまったく異なる。

(3) 他地域との比較

学習指導要領には、市町村規模の地域は、「身近な地域」しか規定されていない。しかし、一つの地域の特色を理解するためには、他の地域と比較してみるとよい。ただし、時間がなくてデータは教師が用意して比較させる。

(4) 調査方法の確認

これは、現在ほとんどの学校で行われていないが、学習指導要領の目標を達成するためには、絶対に位置づけなければならないことである。具体的には、地域調査が、終わった後に、地域的特色を明らかにするうえで、有効となった方法を確認することをいう。これは、都道府県規模の地域も国家規模の地域でも同じである。これを行うことによって、初

めて子どもたちに転移性のある力が身につくのである。

3 地域調査の実際

(1) 景観写真の活用

調査対象地域を実地に踏査することができない場合、景観写真の活用をお勧めしたい。

市内の学校間でそれぞれの地域の景観写真を交換し合うことによって、野外調査の限界を補うことができる。下に示したのは、山口県柳井市の地図と市内を五つの地域に分けた景観写真である。

① 大島地区

柳井市の東の玄関口であり、漁業を中心とした地域である。山が海に迫っており、農業はミカン作りが中心である。

② 中心部

柳井は、商都として発展してきた町である。市街地のほとんどは江戸時代の干拓によって

確保されている。

1980年代の市役所の移動によって、旧市街地と新市街地とが明確に区分された。

③ 室津半島

南部と呼ばれる地域である。古くから半農半漁の産業を伝統とする地域であり、現在もその特色が生きている。

④ 余新地区

この地域は、市街地に近く、近郊農業が行われている地域である。1980年代からバラやカーネーションの栽培が行われている。2006年4月にオープンした「やまぐちフラワーランド」とタイアップしたイメージ戦略を展開している。

⑤ 北部地区

柳井市北部は、玖西盆地の周辺部にある農村地帯であり、稲作が展開されている。

近年圃場整備が進み、1枚あたりの田んぼの面積が広がっている。



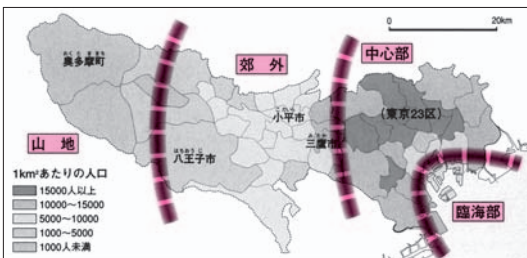
4 地域調査の進め方

(1) 地域調査のストーリー性

帝国書院の地域調査には、一つのストーリーがある。

- 1 八王子市 自分たちが住む市として
- 2 東京都 自分たちが住む都道府県として
- 3 山形県

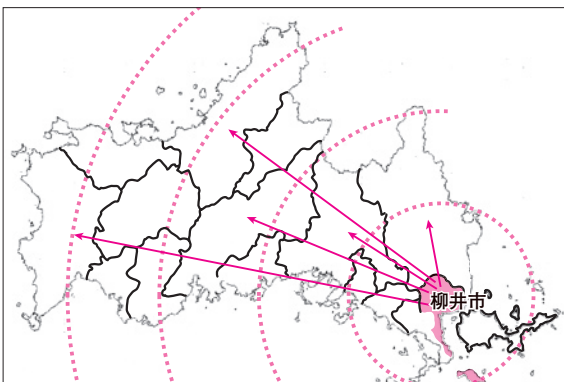
教科書に一貫して登場する4人のキャラクターは、八王子の中学生である。とくに、東京都の調査は、八王子での調査をもとに拡大していく調査として設定してある。



「中学生の地理 初訂版」p.61

この主題図からわかるように、八王子市は、東京の「郊外」にあたる。八王子の特色を東京の他の地域との関連からとらえ直させることもできる。

この発想は、どの学校でも応用することができるし、むしろ、この流れを設定することが自然であるといえる。

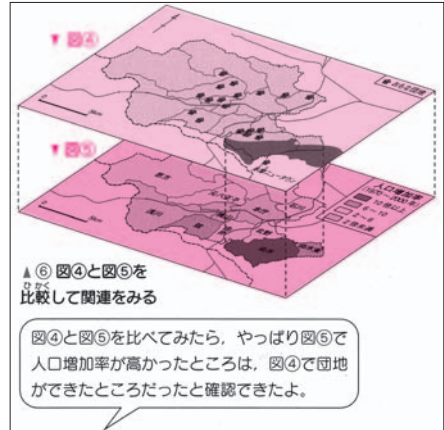


山口県と柳井市

(2) 様々な資料でもっと深く調べる

p.52、p.53の「さまざまな資料でもっと深く調べよう」をみると、地域的特色の新しい発見の仕方についての大きな示唆を受ける。この方法は、p.218～219の「日本の国内の特色をまとめよう」の発想と強く結びつく。

地域調査が進むと調査した結果を、地図の形でまとめることができるようになる。



このように何枚も重ねることで、地域的特色が明らかになる。

(3) 調査をまとめて

地理的なまとめ方というと、ただ単に表やグラフを描き地図の上にもちりばめることではない。地域的特色を考察するために必要な視点を押さえた表現が必要である。そのためには、p.59の都道府県規模の視点を参考にしながらまとめることによって、盛り込むべき内容が決まる。下記のような表を考えてもよいだろう。

	関連	変化	比較
自然			
人口			
資源・産業			
生活・文化			
結びつき			

地理学習の評価は、決して統計の正確さや地図の美しさでははかることはできない。

5 評価

学習指導要領には、「身近な地域の地域調査」について、次のような記述がある。

身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につけさせる。

この目標を見ると、次の二つに焦点を絞って評価をすればよいことが分かる。

(1) 理解と関心を深めさせる

これは、認識に関する評価項目である。子どもたちは、自分たちが住んでいる地域なので、すでにこの調査対象地域に対する理解や関心をもっている。今回の地域調査で子どもたちは、それらが一層深まることになる。

① 理解の深まりの評価

	内 容
第1次	生活経験や小学校での学習経験から調査対象地域に対して現時点でもっている認識を把握し評価の基礎データとする。
	↓
第9次	具体的な地理的事象の考察をもとに形成した地域的特色を把握する。

② 関心の深まりの評価

	内 容
第1次	地域的特色を成立させている要因として、どの地理的事象に注目しているかを把握し評価の基礎データとする。
	↓
第9次	調査結果を見ることによって、地域的特色を成立させている要因としてどの地理的事象に注目するようになったかを把握する。

「理解」「関心」とともに、地域調査の前後を比較してその変容を比較する。

(2) 地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につけさせる

これは、学び方に関する調査項目である。

最終的に明らかになるのは、国家規模の地域の調査が終わるかもしれないが、とりあえずそれぞれの地域の調査が終わるたびに、確認して終わる必要がある。

① 視点や方法の評価

第1学年という発達段階でも地域的特色を明らかにするうえで効果があった視点や方法を言葉にさせることができればよい。子どもたちの口からは、次のような言葉しか出てこないはずである。

○新旧の地形図を比較したこと

○景観写真を使って、情報を収集したこと
教師は、これらに合わせながら「変化に注目したことがよかったんだね」「写真の中に季節の変化を読み取ったことがよかったんだね」という評価を繰り返しながら、子どもたちのものの見方・考え方を高めていくのである。

② 地理的なまとめ方や発表の方法の基礎

地域調査で初めての発表となるので、まず発表させることに意味がある。それぞれの規模の地域の調査が終わるたびに、少しずつ充実させていくことを考えるとよい。

(3) 評価規準

地域調査に関するスタンダードな評価規準はまだ確立されていない。しかし、現時点では具体的な事象を取り上げて、地域的特色を深めることができたなら、Bとしなければならない。今後、データを収集しながら、中学第1学年～第2学年の発達段階で、深めることが可能な規準を探すことになろう。

まとめ方や発表の方法の基礎については、過程と結果を的確に結びつけているかどうかを評価する。